

言語活動の充実をめざす学校支援

上越市立国府小学校チーム

佐藤 慧 (M1)

平野 秀穂 (M1)

金子 緑条 (M2)

清水 登紀子 (M2)

松本 修 (アドバイザー)

学校支援プロジェクトの概要

- 支援校の概要 上越市立国府小学校

学級数 19(特支4含) 児童数 456名 (H23)

- 支援校の校内研究主題

「豊かな言語活動をとおして、学びを深める児童の育成」

- 主な支援内容

- 新学習指導要領の完全実施に伴って、言語活動の場を各教科等に広げた単元・授業づくりに取り組む。
- 主として、校内研修をサポートする。

支援の流れ(公開授業まで)

単元・教材の決定(授業者・研究推進委員会)



単元構想(授業者・支援チームの協働)

← アドバイス



指導案検討会(学年＋研推＋チーム)

← 資料提供



学年検討会(学年＋チーム)

← 改善プラン作成



他クラスでのプレ授業



授業への参加

← 改善プラン作成



公開授業

← アシスタントとして
授業に参加

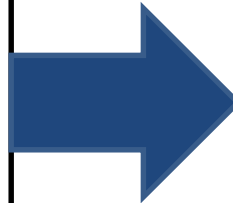
校内研修運営について

1年次(22年度)

- 教員各自が取り組む教科・領域を決定
＝教科等の選択は自由
- 一人1実践を学年部で公開
＝学年部研修のみ
1年間で15実践
- 指導案検討は、研究主任と該当学年で実施
- 授業参観、協議会は該当学年部のみで実施

〈課題〉

- ① 学年部研修のみでは、成果や課題を学校全体で共有することが難しい。
- ② 一時期に研究授業が集中し、指導案検討や授業後の研究協議が十分にできなかった。



2年次(23年度)

- ① 学年を中心とした研究推進体制づくり
- ② 学年・学年部を中心とした研究推進
- ③ 全員参観の公開授業と協議会
(全体研修)の設定
- ④ 教科を絞った研究推進

* 支援チームから支援校への研修運営に関する改善提案

校内研修運営の在り方

〈2年次 校内研修運営の成果〉

- ① 全体研修が位置づけられたことで、実際の授業を通して、成果と課題の共有ができた。
- ② 各学年1公開としたことで、学年部と研究推進委員会による事前の指導案検討や授業後の研究協議が十分に為された。
- ③ どの学年でも、協働的な研修ができた。

校内研修運営の在り方

〈課題・・・来年度へ向けて〉

- さらに、全体での共有と協働のためには
→ 教科を限定する必要性
- 言語活動をつくる上での課題
＝ 国語科の授業づくり
→ 国語を中核とし、焦点化した
校内研修運営の必要性

言語活動をつくる

言語活動をつくるためには・・・

- ① 探究的な活動としての言語活動をつくる。
- ② 学習者間のコミュニケーションをつくる。
＝コミュニカティブな集団をつくる。
- ③ 自他を「比較」し、「異同」がわかり、
「説明」できる。

言語活動をつくる

〈国語科における言語活動の成立条件〉

- ① 話すこと、聞くこと、書くことの知識・技能の重視
- ② 学習者に応じた内容をつくる。
 - 国語科の授業の中で内容をつくる。
(例 読むこと)
 - 他教科・領域と連携する
(例 図工・音楽)

言語活動をつくる

〈他教科等における言語活動の成立条件〉

- ① 教科に即した形式の重視
教科としての知識・理解
用語や説明の仕方等・・・
- ② コミュニケーションの重視
話す・聞く・書く活動をコミュニケーションとして
あるいはコミュニケーションを通じて成立させる。

1 他教科等の学習デザイン

(1) 社会科の実際

単元名 「わたしたちの生活と食料生産」～これからの食料生産とわたしたち～
(小学校5年生 34名 全3時間)

(1) 教科に即した形式の重視

- ①カロリーベースの食料自給率の意味
- ②資料の読み取り方

- ・資料をもとに個々で考える前に、全体でゴマの資料を例に確認する



教科でおさえたい知識・技能として
学習者が共通理解し、コミュニケーションのベースとなるもの

1 他教科等の学習デザイン

(1) 社会科の実際

(2) コミュニケーションの重視

第二次(本時)の資料をもとにカロリーベースにおける食料自給率が低くなる理由を考える場面

・本時の意見交流場面

「作っている場所は日本、そのもとは輸入」

「生まれているのは日本、それを生むニワトリのエサは輸入」



教科でおさえたい知識・技能が、交流場面においても活用されている

1 他教科等の学習デザイン

(1) 社会科の実際

〈成果〉

① 第二次の課題に迫る疑問をもつ

「身の回りには国産の食品が多いのに、なぜ食料自給率はこんなに低いのか」

② 交流活動の有効性

交流活動を通して、自分の考えを深めたり、多面的な意見に触れ、新たな考えをもったりする児童も見られた

〈課題〉

① 資料の読み取り方を学級全体でしっかりと確認する

② 自分の考えを書く際の視点を明示する

③ 交流する際の視点を明示する

1 他教科等の学習デザイン
(2)算数科の実際

単元名 「ひきざん(2)」 (小学校1年生 24名 全12時間)

(1)教科に即した形式の重視

〈算数的用語〉

- ①10のかたまり ②ばら
③わける ④ひく ⑤たす(あわせる)



教科でおさえたい知識・技能として
学習者が共通理解し、コミュニケーションのベースとなるもの

共通理解の過程においても、授業者が用語を教示するだけでなく、学習者自身が言葉にこだわりながら用語の意味を理解し、活用する

1 他教科等の学習デザイン

(2) 算数科の実際

(2) コミュニケーションの重視

- ・算数的用語を用いながら計算の仕方を友達に説明する場面の設定
- ・減加法に限定されにくい問題の設定

○本時の意見交流場面

減加法と減々法の両方が提出され、それぞれの方法について学習者同士のやりとりの中で確認



多様な意見が導き出され、学習者同士の交流活動を通して、計算の説明の仕方を学んでいる

1 他教科等の学習デザイン

(2)算数科の実際

成果と課題

- 説明の仕方を型として教えるのではなく、コミュニケーションを通して、思考したことを言語化することで学習している。
- 授業者が学習者にかかわり、操作の意味付けや思考を整理する。
学習者間のコミュニケーション場面においても同様。

2 国語科の学習デザイン

(1) 説明的文章教材を用いた授業の実際

単元名 「食べ物変身ブックを作ろう」

(第3学年 30名 全12時間)

教材名 「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつ教えます」

(1) 学習者に応じた内容をつくる

読むことの教材を活かして、オリジナルの
「食べ物変身ブック」を作る

(2) 話す・聞く・書くことの知識・技能

「食べ物変身ブック」を作るための書き方を学ぶ

2 国語科の学習デザイン

(1) 説明的文章教材を用いた授業の実際

成果と課題

- 単元のゴールである「食べ物変身ブック」を作るためには、説明文教材をどう読むか、教材から何を学ぶか

説明文・・・論理を学ぶ

文章の論理関係がわかる

2 国語科の学習デザイン

(2) 文学的文章教材を用いた授業の実際

単元名 「音読発表会をしよう」

(第4学年 41名 全10時間)

教材名 「一つの花」

(1) 話す・聞く・書くことの知識・技能

登場人物の心情の読みを本文の叙述を根拠にして
交流する

(2) 学習者に応じた内容をつくる

音読発表会で音読を発表し合う

2 国語科の学習デザイン

(2) 文学的文章教材を用いた授業の実際

成果と課題

- ① 「～の読み方を考えよう」という学習課題の設定には指導する知識・技能を学習者に明確に意識化させる必要がある。

- ・複数の読みが表われるような、部分テキストを対象とすること。
- ・音読の表現方法ではなく、なぜ登場人物がそういう心情だと読めるのかの検討を中心にする。

- ② 教材と学習内容のマッチングを図る必要がある。

考察

- 言語活動の成立条件に従うと、他教科等においては言語活動は成立し易い。
- 国語科は学習内容の設定と探究的な課題の設定が難しいので、質的な検討と実践の積み重ねがなお必要。

学習されるべき知識・技能は授業者が設定する。
探究的な課題をつくる。

おわりに

平成24年度＝中学校でも

新学習指導要領完全実施



「言語活動の充実」のための取り組み

探究的な活動の中で、活用を図ることにより、
言語的思考の知識・技能を確かなものにする。



学習者の実態に応じた学習デザイン

引用・参考文献

- 1) 吉田裕久:「学校全体で取り組む言語活動～全体構想・指導体制づくり～」,『言語活動モデル事例集』, pp.14-16, 教育開発研究所, 2011.3
- 2) 藤岡宏章:「各学校における言語活動を重視した指導の充実を図る取組」,『初等教育資料』, №840, pp.9-10, 東洋館出版社, 2008.11
- 3) 松本修:『文学の読みと交流のシナトロジー』, pp.83-84, 東洋館出版社, 2006.7
- 4) 松本修:「言語活動のとらえ方」, 上越市立国府小学校校内研修当日資料, 2010.11
- 5) 難波博孝:「「探究」から「習得」「活用」へー「習得から活用へ」という呪縛から逃れよー」,『国語教育』, №721, p.11, 明治図書, 2010.4